はしがき

本叢書は、文部省高等学校学習指導要領に準じて、日栄社が、多年の信用と経験とにより、高校生諸子の学習・受験の好伴侶として、新しい構想のもとに鋭意刊行した国語参考書の決定版である。本叢書の執筆刊行にあたっては、編著者らは、常に協議を重ね衆知を集め、諸説を吟味検討して注釈の完璧を期するとともに、あくまで良心的に、高校生諸子を対象として「わかりやすく」かつ「親切に」とつとめたつもりである。われわれはここに、大いなる自信をもって、諸子のもとにこの叢書をおくる。なお、われわれは、常に読者諸子の声を謙虚に聞きたいと念願している。

お気づきの点があれば、どしどしお聞かせ願いたい。

凡例

一、大鏡の本文は『日本古典文学大系』本、増鏡の本文は『日本古典全書』本によった。ただし読解の便宜のため、句読点・引用符号・漢字・仮名づかいを適宜改め、またできるだけ多く読みがなをつけて読みやすくするとともに、原文の左わきには、かたかなで読み方を示した。

二、解説は、その章の内容を簡潔にまとめたものであるが、必要に応じて、解釈・鑑賞の手引きとなるようなことがらをも加えた。

三、口訳は、原文に即してわかりやすい訳文を作ることにつとめた。原文になく訳文に補った個所には〈　〉をつけて明示し、原文と訳文を比較対照するに便ならしめた。

四、読解の要点には、原文を読み解くうえのヒント・手引きになるような語句・語法・文脈上の要点を解説した。古文の実力をつけるには、いきなり訳文を読むのではなく、できるだけ自分の力で考えてみることがたいせつである。それゆえ、この「読解の要点」を手がかりとして実力を養成されんことを切望する。

五、語釈と文法は、平易なことばで、しかしできるだけ詳しく説くことを心がけた。摘出した語句には、必要があればまず〔　〕の欄内に品詞名を示して、次に語義を説いた。

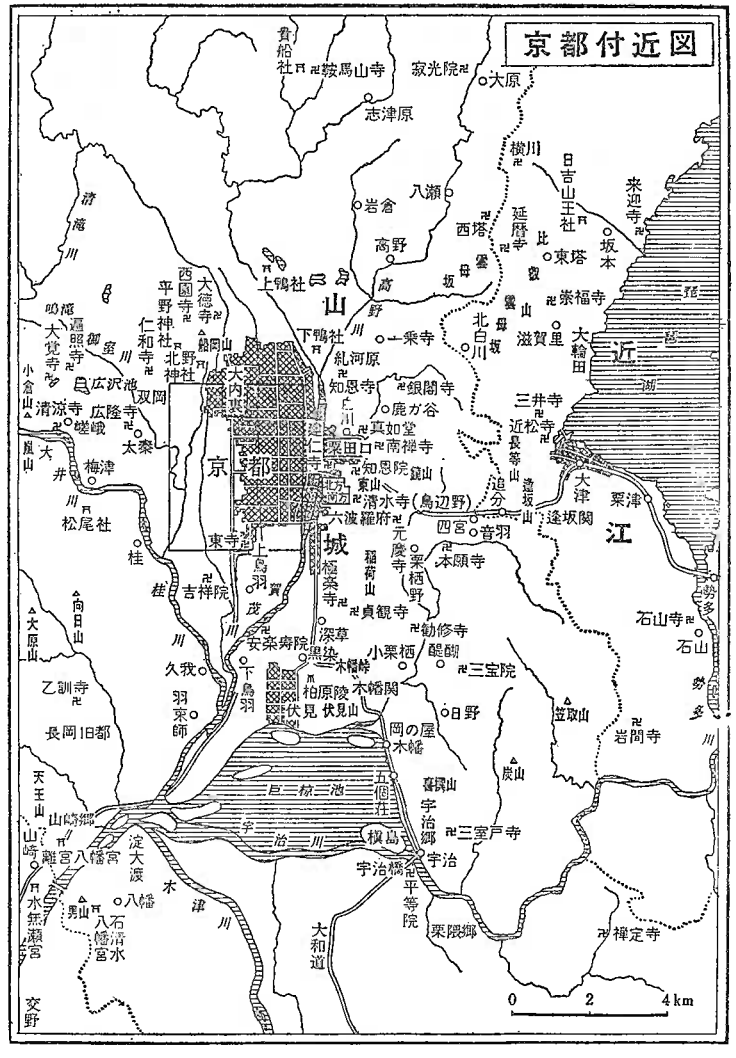
六、重要語・文法の要点では、解釈上とくに注意しなければならない語句や、文法的に検討しておかなければならない語句をとりあげて説明した。特に他の古典を読むうえにも基礎となる事項については詳細なる検討を加えてあるから、十分に味読してほしい。

七、鑑賞の欄を、重要な章ごとに設け、文学作品としての味わい方や、『大鏡』・『増鏡』の諸問題についての考察を行なった。

八、右の五、六の説明にあたっては 文法参照 重要語参照 等の指示をして、相互の関連をはかり、できるだけ学習上の便宜をはかるように意を用いた。

九、研究問題とその解答を、重要な章に添えた。問題は入試問題中から厳選するとともに、新作問題をも加えたが、これによって各自の実力をテストされたい。

一〇、必要に応じて本文中に地図を示した。またさし絵もできる限り多くその個所に挿入した。



目次

解説……七

大鏡

一 序文

〔一〕 さいつころ、雲林院の菩提講に……一九
〔二〕 今ひとりの翁、「いくつといふことは……二五
〔三〕 たれも少しよろしきものどもは、……二六
〔四〕 今ひとりに、「なほも翁の年こそ……二九
〔五〕 「さてもうれしく対面したるかな。……三二
〔六〕 かくて講師待つほどに、……三四
〔七〕 世継がいふやう、「世はいかに興ある……三七
〔八〕 「まめやかに世継が申さむと思ふことは……三九
〔九〕 「世の中の、摂政・関白と申し、……四三
〔参考〕 今鏡序文……四六

二 花山天皇紀

〔一〕 次の帝、花山天皇と申しき。……四八
〔二〕 あはれなることは、おりおはしましける……五〇
〔三〕 さて土御門より東ざまにゐて出だし……五六
〔四〕 花山寺におはしましつきて、……五九

三 基経伝

小松のみかどの御母、この殿の御母、……六二

四 時平伝

〔一〕 このおとどは基経のおとどの太郎なり……六六
〔二〕 このおとど子どもあまたおはせしに……七一
〔三〕 なきことによりかく罪せられたまふを……七五
〔四〕 かくて筑紫におはしつきて、……七七
〔五〕 筑紫におはします所の御門もかためて……八二
〔六〕 このことども、ただちりぢりなるにも……八七

〔七〕 また、雨のふる日、うちながめ給ひて、……九〇
〔八〕 あさましき悪事を申し行ひたまへりし
罪により、……九二
五 実頼伝
敦敏の少将の子なり、佐理の大弐、……九八
六 頼忠伝
ひととせ、入道殿の、大井川に逍遙せさせ ……一〇四
七 伊尹伝
〔一〕 男君達は、代明の親王の御むすめの ……一〇九
〔二〕 この大納言殿、よろづにととのひたま
へるに ……一一〇
〔三〕 少しいたらぬことにも御たましひの ……一一三
八 道隆伝
〔一〕 入道殿御岳にまゐらせたまへりし道にて、…一一六
〔二〕 この帥殿の御一つ腹の、十七にて中納
言になり ……一一〇
〔三〕 この中納言は、かやうにえさりがたき事の…一一四
〔四〕 御目のそこなはれ給ひにしこそ ……一一〇
〔参考〕 栄華物語「浦々のわかれ」……一一五
九 道長伝
〔一〕 このおとどは法興院のおとどの御五男 ……一一八
〔二〕 四条大納言の、かく何事もすぐれ ……一一〇
〔三〕 さるべき人は、とうより御心だましひ
のたけく ……一一五
〔四〕 「子四つ」と奏してかく仰せられ議する
ほどに ……一一八
〔五〕 世間のひかりにておはします殿の、……一一四
〔六〕 帥殿の、南の院にて人々集めて弓あそ
ばしに ……一一五
〔七〕 また、故女院の御石山まうでに ……一一二
〔八〕 三月巳の日の祓に、やがて逍遙したま
ふとて ……一一四
〔九〕 女院は、入道殿をとりわき奉らせたまひて…一一六
〔一〇〕 されば、上の御局に上らせたまひて ……一一〇
〔一一〕 中の関白殿・粟田殿うちつづき ……一一八

一〇 昔物語
〔一〕 公忠の弁をば、大方のことにとりても ……一一五
〔二〕 「村上の帝はた申すべきならず。……一一〇
〔三〕 延喜の御時に、古今撰ぜられしをり ……一一五
〔参考〕 大鏡巻末 ……一一〇
増鏡
一 序文
きさらぎの中の五日は、鶴の林に薪つきにし
日なれば ……一一〇
〔参考〕 序文の続き ……一一〇・一一一
二 おどろの下
〔一〕 法皇かくれさせ給ひにし後は ……一一二
〔二〕 鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて …一一四
〔三〕 上のその道をえ給へれば、下もおのづ
から ……一一八
三 新島守
〔一〕 このおはします所は、人はなれ里遠き ……一一二
〔二〕 初秋風のたちて、世の中いとどものが
なしく ……一一五
四 久米のさら山
〔一〕 出雲の国八杉の津といふ所より ……一一九
〔二〕 海づらよりは少し入りたる国分寺とい
ふ寺を ……一一二
〔参考〕 増鏡巻末 ……一一四
付録 敬語法の理解 ……一一六
解釈上の重要事項索引 ……一一三
語句索引 ……一一四
京都付近地図 ……一一

大鏡

一　序文

［解説］文徳天皇から十四代百七十六年間の事跡は、雲林院の菩提講で奇（くし）しくもめぐり合った、大宅世継（おおやけのよつぎ）・夏山繁樹（なつやまのしげき）という百数十歳の超老人の往昔談という形で述べられていく。語られる舞台の設定――語り手の経歴――老人の昔がたりの意義と述べつづけて、その後に自分の語ろうとするのは入道道長公の栄えあそばす有様であり、それを言うために多くの天皇・皇后・大臣方のことを申しあげるようにもなると、本書の述作の目的や構想などを明らかにしている。

【一】さいつころ、雲林院の菩提講にまうでてはべりしかば、例の人よりはこよなく年老い、うたてげなる翁ふたり、おうなと来あひて、同じ所にゐぬめり。あはれに同じやうなるもののさまかなと見はべりしに、これらうち笑ひ見かはしていふやう、「年ごろ昔の人に対面して、いかで世の中の見聞く事どもをきこえあはせむ、このただ今の入道殿下の御有様をも申しあはせば

口訳　先ごろ、わたくし（作者）が雲林院の菩提講に参詣いたしましたところ、普通の人よりは格別に年老い、異様な感じのする爺さん二人と、婆さん（一人）とが来合わせて、同じ場所にすわっていました。ほんとにまあ、（三人とも）そろいもそろって同じような老人たちだなあと（思って）見ておりましたところ、この老人たちはたがいに笑いながら顔を見合わせて、（さて、そのうちの一人（大宅の世継）が）言うことには、「（わたしは）以前からずうっと、昔なじみに会って、何とかして世の中の今まで見たり聞いたりしてきたいろいろな出来事をお互いに話し合い申したいものだ、（また）現在の入道殿下（藤原道長）の御有様などもお互いに話し合い申したいものだと思っていましたところ、実にうれしいことにも、（こうして）お会い申したものですなあ。（もうこれで年ごろの願いもかないましたので）今こそ心残りなくあの世へ行くこともできるでしょう。言いたいと思うことを言わずにいるのは、（諺にもあるように、）ほんとうに何かが腹の中にたまっている（ような、いやな）気持ちがするものですなあ。それですから古人は、何か言いたくなると、穴を掘って（その中に）言い入れたのだろうと思われます。（ともあれ）お会いできたことはくれぐれも嬉しいことですなあ。それにしても、（あなたは、いったい）いくつにおなりなさいましたか。」と言うと、

やと思ひしに、あはれにうれしくもあひ申したるかな。今ぞ心やすくよみぢもまかるべき。おぼしき事いはぬは、げにぞ腹ふくるるここちしける。かかればこそ昔の人は、ものいはまほしくなれば、穴を掘りてはいひ入れはべりけめとおぼえはべる。かへすがへすうれしく対面したるかな。さても、いくつにかなりたまひぬる。」といへば、

［研究］一、次の語句を現代語に直せ。

(イ)例の人よりはこよなく年老い、うたてげなる翁ふたり、おうなと来あひて、同じ所にゐぬめり。

(ロ)今ぞ心やすくよみぢもまかるべき。（類　神戸市外大）

二、文中に、連体形で文を切っている部分を指摘し、その理由を簡潔に述べよ。

三、(イ)「いかで」の意味はどの部分まで及んでいるか。　(ロ)「かかれば」は前文のどの部分をさして言ったことばか。

読解の要点　菩提講に参詣した人々の中の、ある老人がもう一人の老人に話しかけているという場面がつかめれば、文の筋はわりあいにつかみやすい。ただ、敬語とくに謙譲語と丁寧語は、「まうで・はべり・きこえあはせ・申しあはせ・申し・まかる」などと連続的に出てくるから、これらの意味・用法を正しくつかむようにつとめる。また、後半に係り結びになっているものが多い。これも文法の基礎として追求しておこう。

語釈と文法　○さいつころ―「先つころ」の音便。「つ」は「の」の意の古い格助詞。用法が固定化しているので、全部で一語の名詞とみる。類例「天つ風」・「沖つ白波」など。○雲林院―京都市北区紫野の大徳寺の東南にあった、天台宗の寺。三ページの地図

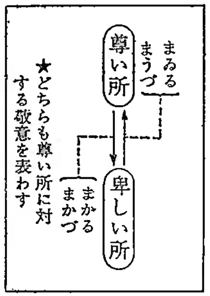
参照。その後荒れはてて、観音堂だけ現存。○菩提講―極楽往生を求めるために法華経を講ずる法会。雲林院の菩提講は五月に行なわれたという。◎まうでてはべりしかば〔まうで(ダ下二・用)・て(接助)・はべり(ラ変(補)・用)・しか(過・已)・ば(接助)〕―「まうづ」は尊い所へ行くという意の謙譲語で、寺に対する敬意。文法参照「はべり」は丁寧語で、口語の「ます」に当たる。聞き手に対する敬意。なお、この「て」を完了の連用形に見る説もある。「しかば」は「已然形+ば」の形で、ここは偶然的な事件の前提。「……したところ」の意。○例の人―普通の人。「いつも参会する人」の意ではない。○うたてげなる〔形動・体〕―異様な。この話の内容をいかにも古めかしく権威あるものにするうえに効果を示す語である。○おうな―老女。「おむな」と書いても同じだが、「をむな」とあると「をみな」と同じで、「女」の意になる。○ゐぬめり〔ゐ(ワ上一・用)・ぬ(完(強め)・終)・めり(婉・終)〕―「ゐる」は、すわるの意。「めり」は現在視界内の推量(「どうやら……の様子だ」・「自分には……のように思われる」の意)が原義であるが、ここは断定してもよいところを婉曲に(やわらげて)いう用法。◎あはれに―形動の連用形。感動詞ふうの用法で、すぐ後の「あはれにうれしくも」の場合も同じ。○もののさま―「もの」はばくぜんとした対象を示すだけの意味をもつ。類例「もののあはれ」。○年ごろ―数年来。転じて「平生」の意にも用いられる。類例「月ごろ」・「日ごろ」。◎昔の人―昔の知り合い。この二人の翁はつづく文でわかるように昔なじみであった。もちろん「古人」の意もあり、六行あとの場合はその意である。◎対面―「たいめん」の「ん」を略して読むことに注意。前出の「雲林院」も「うんりんゐん」の略で、はなはだしくは、「うりゐん」または「うりゐ」とも読むことがある。◎いかで―副詞で、希望・疑問・反語などの意がある。ここは下の「む」・「ばや」と呼応して希望の意。文法参照 ○きこえあはせむ〔きこえあはせ(サ下二・未)・む(希・終)〕―「きこゆ」は「言う」の意の謙譲語。したがって「あはす」と複合した場合にも、謙譲の意をもつ。つぎの「申しあはせ」の「申す」も「言う」の意の謙譲語だから、まったく同じ形となる。なお「ばや」は自己の希望を表わす終助詞。○入道殿下―藤原道長。「入道」は仏門に入った人であるが、とくに三位以上の人についていうことが多く、それ以下の人には「発意・道心」などを用いる。「殿下」は皇族・摂政・関白などの敬称。大鏡は、解説にも述べたように道長のことに中心をおいて書いている。○あひ申したるかな―この「申し」は動詞についている場合だから丁寧の補助動詞。前の「申しあはせ」の「申し」の場合とちがう点に注意。○よみぢ―冥土へ行く道。下に「へ」が略された形。◎まかるべき〔まかる(ラ四・終)・べき(可・体、「ぞ」の結び)〕―「まかる」は尊い所から卑しい所へ退出する意の謙譲語。ここは「行く」という自分の動作をへりくだって言う用法だが、やはり現世に対する敬意を示しているとみる。文法参照 ○おぼしき―「……したいと思う」の意で、シク活用の形容詞の連体形。動詞の「おぼす」・「おぼゆ」などと混同しないこと。◎げに―「昔からいわれている・古歌にもある・世間でも言っている」が、ほんにそのとおり、という意。「実に・たいそう」などと訳してはいけない。このことばによって、「おぼしきこといはぬは腹ふくるる心地す」ということばが、当時すでにことわざになっていたことがわかる。『徒然草』一九段にも

「いひつづくれば、みな源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今さらにいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず」とあるのを、すでに学習した人も多いであろう。○腹ふくるるここち―下の「しける」の主語。「腹・ふくるる(ラ下二・体)」という連体修飾語があるから、「ここちす」を複合サ変動詞に見てはいけない。「ここち+す」である。○しける〔し(サ変・用)・ける(詠嘆・体、「ぞ」の結び)〕―この「けり」は、そのことにはじめて気づいて詠嘆する意。○いひ入れはべりけめ―この「けめ」は過去の事実を推量する助動詞の已然形で、上の「こそ」の結び。○おぼえはべる―文法参照 ○いくつにかなりたまひぬる〔いくつ(名)・に(格助)・か(係助・疑)・なり(ラ四・用)・たまひ(ハ四(補)・用)・ぬる(完・体、「か」の結び)〕―「たまひ」は四段活用だから尊敬語。話し手(大宅の世継)がもう一人の翁(夏山の繁樹)を尊敬している。敬意の表わし方については三六ページ参照のこと。

文法の要点　○いかで―希望を表わすときは、希望・意志の語と呼応するから、「ばや・がな(が)・む・まし」などの語に着眼する。ただし、「む・まし」は推量の意になると、「いかで」が疑問や反語の意になるからその見わけができるように努力する。ここを図示すると、次のようになる。

〔いかで―世の中の……きこえあはせむ
〔(いかで)―このただ今…申しあはせばや

○まうづ・まかる―「まうづ」と同類の語は「まゐる」、「まかる」と同類の語は「まかづ(まかりいづ)」である。下の図参照のこと。なお、これらは、尊卑に関係なく、単に「行く・来る」という自分の動作を謙譲的に、あるいは丁寧的に用いる場合も生じてくるが、原則的には前述のように考えるべきものである。



○はべる―「はべる」はラ変の連体形であるが、上に係助詞もないのに連体形で言い切っている。こういう言い方は会話文に多く、やややわらげて、あるいは新しい感じの言い方で、源氏物語などにもしばしばあらわれる。地の文(会話以外の普通の部分)ではやはり、下に「ことよ」の略された詠嘆的な言い方とみるのがよい。しかし、この言い方は時代が下るとともに次第に地の文にも多く用いられるようになり、その結果ラ変が四段活用に変わることになる。

語	品詞
かかれば	接
こそ	係助(係)
昔	名
の	格助
人	名
は、	係助
もの	名
いは	ハ四・未
まほしく	希・用
なれ	ラ四・已
ば、	接助
穴	名
を	格助
掘り	ラ四・用
て	接助
は	係助
いひ入れ	ラ下二・用
はべり	ラ変(補)・用
けめ	過推・已(結)
と	格助
おぼえ	ヤ下二・用
はべる。	ラ変(補)・体

【解答】 一、(イ)普通の人よりは格別に年老い、異様な感じの爺さん二人と婆さんとが来合わせて、同じ所にすわっているようです。
(ロ)今こそ心残りなくあの世へ行くことができるでしょう。

二、①「まかるべき」の「べき」。②「ここちしける」の「ける」。③「おぼえはべる」の「はべる」。④「たまひぬる」の「ぬる」。（理由）―「べき」と「ける」は係助詞「ぞ」の結び。「ぬる」は係助詞「か」の結び。「はべる」は会話文の終わりに用いられたもので、ズバリと言い切らないで、やや、やわらげた言い方をしたもの。

三、(イ)申しあはせばや。(ロ)おぼしき事いはぬは、げにぞ腹ふくるるここちしける。

鑑賞　大鏡という作品が成功した原因の一つとして、その語られる舞台の選び方が適切であったことが挙げられよう。説経などの集まりで、それが開かれる前のつれづれな時間は、それでなくても何かおしゃべりがしたいものだし、適当な話題を持ち合わせていない人は他人の話にそれとなく耳をかたむけるものである。ましてはからずも旧知の老人がめぐり会えば、懐古談に花が咲くのは当然のことである。いったいこのような法会に集まる人はどういう性格の人であろうか。すなおに講説をうけ入れて心のやすらぎとしようとする者もあろうし、悩みや苦しみを問いただして救いを得たいと思うものもあろう。いずれにしても結論的には仏の教えにとけこみ、そこに真理をつかみたいという点では一致しているといってさしつかえなかろう。このような真実をもとめる純粋な人々の前でこの二人の超老人が自己の見聞を心をこめて語ること、つまり世の人々のもとめてやまぬ過去の事件の真相、真実の再現が満座の注目をひかないはずはない。このような自然な構想は読者のがわにしてもきわめて親しみやすく「法の師の世のことわりを説き聞かせむ所」（『源氏物語』"帚木"）にみずからをおくような気持ちで読んだものであろう。

【二】今ひとりの翁、「いくつといふことはさらにおぼえはべらず。ただし、おのれは故太政のおとど貞信公の、蔵人の少将と申ししをりの小舎人童大犬丸ぞかし。ぬしはその御時の母后の宮の御方のめしつかひ、高名の大宅の世継とぞいひはべりしかしな。さればぬしの御年は、おのれにはこよなうまさりたまへらむかし。みづからは小童にてありし時、ぬしは二十五、六ばかりのをのこにてこそはいませしか。」といふめれば、世継「しかしか、さはべりしことなり。さても、ぬしの御名はいかにぞや。」といふめれば、「故太政大臣殿にて元服つかうまつりし時、『きんぢが姓は何ぞ。』とおほせられしかば、『夏山となむ申す。』と申ししを、やがて繁樹となむつけさせたまへりし。」などいふに、いとあさましくなりぬ。

［口訳］もう一人の老人が「何歳ということは、いっこうにおぼえておりません。ただし、わたくしは故太政大臣貞信公（藤原忠平）が、《まだ》蔵人の少将と申しあげた時分の小舎人童《としてお仕えした》大犬丸《です》よ。あなたは、その御代の帝の御母后の御所の召し使いで、大宅の世継といったあの有名な方でしたなあ。ですから、あなたのお年は、この私よりもずっと上でいらっしゃるでしょう

よ。わたくしが《まだ》ほんのこどもでした時に、あなたは《もう》二十五、六ぐらいの一人前の男でおいでしたよ。」と言うと、世継《は思い出して》「そうそう、そのとおりでした。ところで、あなたのお名前は何とおっしゃったでしょうか。」と言うと、「《わたしは》故太政大臣のお邸で元服いたしました時、《貞信公が》『お前の姓は何というか。』とおっしゃいましたので、『夏山と申します。』と申しあげると、その名にちなんで繁樹とおつけになりました。」など言うので、《あまりにも古い話なので》すっかり驚いてしまいました。

［研究］次にあげる(イ)～(リ)の語句は、どの人物を意味するか。後にあげる人物(A)・(B)・(C)の符号で答えよ。

(イ)今ひとりの翁　(ロ)蔵人の少将　(ハ)大犬丸　(ニ)ぬし（はその御時）　(ホ)おのれ（にはこよなう）　(ヘ)みづから
(ト)ぬし（の御名）　(チ)故太政大臣　(リ)きんぢ
(A)大宅世継　(B)夏山繁樹　(C)貞信公

読解の要点　よく似ている語、とくに「申しし」・「ぞかし」・「はべりしかしな」・「らむかし」・「いませしか」・「しかしか」・「さはべりし」・「つかうまつりし」・「おほせられしか」・「たまへりし」・「あさましく」といったように、連続的に「し」が出てくる。これらの